

同志社仙台分校

—宮城英学校から東華学校へ—

もと い やす ひろ
本井 康博 (元大学神学部教授)

同志社フェア in 仙台

さる六月十七日、仙台で同志社フェアが開かれた。これまでの函館、安中、熊本に比べて、仙台の場合「同志社ゆかり度」は低い。では、なぜ仙台か。

「もうひとつの同志社」が開校された唯一の都市だからである。

学校は、「宮城英学校」という名で仮開校（一八八六年）され、翌年の本開校時に「東華学校」と改称された。今年の本開校から数えてちょうど百三十年（仮開校なら百三十一年）を迎えるので、開校の日を選んで、同志社フェアが開催された。

学校はわずか五年半で閉校（一八九二年）されたので、今では同志社でも仙台でも存在感は希薄である。そのため、同志社校友会宮城県支部は本部の支援を受けて、記念誌、『東華学校ものがたり—仙台教育史のあけぼの—』を四月に刊行した。

編集協力者（執筆者）としても、同書がこの学校を広く知ってもらおうきっかけになれば、と期待せずにはおれない。

東華学校

校長に就いたのは、新島襄である。自身、「学校之主義ハ同志社ト一様ニ有之候間、同志社之分校と申すも不苦と存候」と断言する（『新島襄全集』三、四七一頁）。仙台校は京都「本校」に対して「同志社之分校」にあたる、というのである。

新島だけでなく、他教派の牧師、田村直臣から見ても「同志社分校」であった（田村直臣『信仰五十年史』一五二頁、警醒社、一九二四年）。

実は新島の生前、同志社ゆかりのキリスト教（会衆派系）学校は全国各地にくつもあつた。北越学館（越後）、新潟女学校、前橋英和女学校（現共愛学園）、泰西学館（大阪）、梅花女学校（同、現梅花学園）、神戸英和女学校（現神戸女学院）、神戸女子神学校、順正女学校（岡山）、松山女学校（現松山東雲学園）、熊本英学校、熊本女学校などである。

しかし、そのいずれもが同志社の「姉妹校」、あるいは「兄弟校」に留まる。新島が自ら校長に就いたのは、京都以外では仙台だけである。要するに同志社分

校と言えるのは、仙台の他にはない。

これを可能にしたのは、県市の肩入れと地元有力者たちの支援であつた。県令（知事）が理事長を務め、開校資金は仙台の資産家たちが用意した。同志社からすれば「半公半私」立であつた。それだけに、新島の熱の入れようも熱く、開校準備に東京や仙台に再三、出向いたばかりか、本開校の時には同志社の卒業式を欠席してまで、夫人（八重）同伴で駆けつけ、開校式に臨んだ。

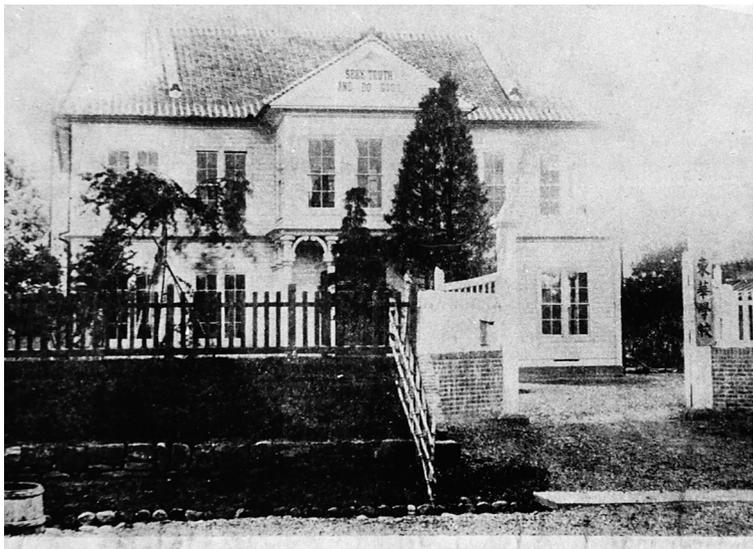
新島校長は、校長代理（副校長）として腹心の市原盛宏（例の「熊本バンド」の一員で、同志社教授）を仙台に送り込んだ。この人事は同志社の外国人教員たちにはきわめて不評で、「市原を失うくらいなら、宣教師ふたりを手放すほうがまし」とも、「彼が抜けた穴は、容易に埋められない」と批判された（拙著『京都のキリスト教』一八七〜一八八頁、同志社教会、一九九八年）。

スタッフとしては他にも同志社から数名が順次、派遣された。外国人教員も同様で、最終的には五人の宣教師がミッシェン（アメリカン・ボード）から次々と送

り込まれた。その中軸は、大阪在留十二年に及んだデフォレスト（J.H.DeForest）である。彼もまた、東華学校を「同志社分校」とみなす（ゼー・エツチ・デフォレスト『廿年間の宣教師経歴』二三頁、『回顧二十年』警醒社書店、一九〇九年）。

この分校は、九十年代に入り世相が欧化主義から国粹主義へと急転するや、逆風に見舞われた。キリスト教離れした県市は分校と手を切り、無宗教の公立学校（現仙台第一高等学校）を新設（再興）した。

「半公半私」の破綻である。同床異夢の実態が露呈したうえに、新島校長が亡くなり、市原副校長がイェールに留学したことも響いた。学生の大半は、同志社分校の敷地や校舎をそっくり借用して開校された公立学校に移った。



「東華学校」の看板を掲げる校門(仙台市清水小路。『東華学校ものがたり』所収)

一方、東華学校の旧スタッフ（信徒）の中には、仙台に踏みとどまって伝道に専念した者がいた。その先頭に立ったの

が、デフォレストであった。

彼と新島との交流はアメリカで始まっていた。東華学校開校式に臨んだ宣教師のカーティス (W.W.Curtis) は、ボストンのミッション本部に、こう報じる。

「仙台への熱烈な期待を「新島が」語るのを、しかもこみ上げて来る熱い思いのために声をふるわせながら語るのを聞いて、少なくとも私たちのひとは、ラットランド「ヴァーモント州」での「アメリカン・」ボードの集会にひき戻され、彼「新島」が京都の学校「同志社設立」のために訴えるのを聞くかのような思いになりました」(拙著『アメリカン・ボード二百年―同志社と越後における伝道と教育活動―』二〇七頁、思文閣出版、二〇一〇年。「」は本井)。

J・H・デフォレスト

「私たちのひとり」とは、デフォレストのことである。彼の胸には新島の「仙台スピーチ」は、「ラットランド・アピール」の再現のように響いた。新島による「仙台への熱烈な期待」の表明は、東北地方に同志社(学園と教会)の拠点を

築きたいとの願いからである。

それまでの同志社系の教会や姉妹校は、十余年にわたって京阪神を主軸に西日本で発展してきたが、今後は東北、さらには北海道へも、と新島は熱望する。

それが具体化するのが二度目の渡米中(一八八五年)のことで、新島は東北にもうひとつの同志社」設立構想を固めるに至った。

思い返せば、そもそも同志社開校を夢見たのも、これより十余年前の最初の渡米中のことであつた。アメリカ留学を終えた新島は、ミッションの送別会(一八七四年)で帰国後の学校設立の夢を語り、そのための寄付を会衆に訴えた。この時の献金が、一年後に同志社開校を可能にしたことから、「ラットランド・アピール」は時に同志社の起点

とも言われる。その現場にいたデフォレストもまた、新島と同時に宣教師に任命され、共に日本へ派遣される身であつた。それより十三年。デフォレストは思いがけなくも仙台で新島のスピーチを再び聴く。要するに、最初の渡米時に同志社(本校)設立の夢を抱いた新島は、二度目の渡米中に今度は分校の設立を志すに至つたのである。「ラットランド・アピール」と「仙台スピーチ」が連動しているのを体感したのが、デフォレストである。

彼は大阪から仙台に移ると、教育だけでなく伝道にも尽力し、まもなく同志社系(会衆派)の宮城組合教会(現日本キリスト教団仙台北教会)を立ち上げた。

そして閉校後もそのまま仙台に残留し、二十五年にわたって東北伝道に腐心した。仙台は彼の終の棲家となり、墓も設けられた。彼が住んだ宣教師館、「デフォレスト館」は現存し、昨年、国から重要文



東華学校遺址碑(仙台市連坊小路。『東華学校ものがたり』所収)



同志社大学今出川キャンパス(クラーク記念館前)に横たわる牛の石像



今も残るデフォレスト館(重要文化財。東北学院土樋キャンパス。『東華学校ものがたり』所収)

化財に指定された。これは、永年、仙台を代表する洋館として市民に親しまれた「デフォレスト記念会堂」(一九四五年に空襲で焼失)や、学校跡地の「東華学校遺址碑」ともども、デフォレストが仙台

市民に残した「遺産」である。それに対して、彼は京都や同志社本校とは無縁であつたので、同志社での知名度はゼロに等しい。が、彼を偲ぶ品が学内にないわけではない。クラーク記念館

前に寝そべる牛の石像と「大日如来」と彫られた石碑である。

北野天満宮を彷彿させるこれらの遺物は、かつて大阪（川口居留地）にあったデフォレスト家の庭に置かれていた。石像は「同志社七不思議」の筆頭としてキヤンパス・ガイドの学生たちには大人気であるものの、誰も旧蔵者を知らない。

内ヶ崎作三郎

さて、仙台分校には、およそ五百人の生徒、学生が学んだ。『東華学校ものがたり』では、一力健治郎（河北新報創業者）、日野真澄（同志社大学教授）、内ヶ崎作三郎（早稲田大学教授）、山梨勝之進（学習院院長）、真山青果（作家）、児



内ヶ崎作三郎（小野寺宏『内ヶ崎作三郎の足跡をたどる』私家版、二〇〇七年、の口絵）

至といった同志が、揃いも揃って同志社出身者であるうえに、岸本が東華学校教員でもあったのは、これまた奇遇である。

日野真澄

いまひとり、同志社本校ゆかりの生徒がいた。日野真澄（一八七四〜一九四三）である。山形の出身で、東華学校在学中にデフォレストから洗礼を受けた。その関係から、一八九二年の閉校後、本校とも言うべき同志社神学校に進んだ。

一八九七年に卒業すると、ニューヨーク市マンハッタンにある名門校（ユニオン神学校とコロンビア大学）で神学の研鑽を積んだ。

帰国（一九〇一年）後、同志社神学校に招かれ、教授に就任。在職中の一九一二年に同志社は（専門学校令による）大学に昇格し、二学部（神学部と政治経済部）を設けた。日野は原田、助総長のもとで初代神学部長に就任する。しかし、原田の大学運営をめぐる学内紛争に巻き込まれて辞職。その直後に、自宅が不審火により全焼し、五人の子どもがすべて焼死するという私的惨事にも見舞われた。

玉花外（詩人）、栗原基（第三高等学校教授）を紹介した。そのうち最近、脚光を浴びたのが内ヶ崎（一八七七〜一九四七）で、今年の上半期に企画展「内ヶ崎作三郎―教育者・牧師・政治家の生涯―」が東京（友愛労働歴史館）で開催された。

彼は宮城県の出身で、東華学校の在籍はわずか一か月であったが、同志社出身の教員、片桐清治（伝道師でもあった）から英語や歴史を学んだ。内ヶ崎もまた同校を「精神的には京都同志社の分校のやうなものであった」と見なす（内ヶ崎作三郎「吉野作造君と私」九九頁、赤松克麿編『故吉野博士を語る』中央公論社、一九三四年）。

すなわち、「先生は皆、同志社出身である（中略）。それ故、「私は」間接に同志社とも関係あるわけである」と自認する（内ヶ崎作三郎「本郷教会時代の憶出」一六三頁、『本郷教会創立五十年』、日本組合本郷基督教会、一九三六年）。

中退後は第二高等学校（東北大学の前身校）へ転じ、アメリカ・バプテスト派の女性宣教師、ブゼル（A.S. Buzzell、仙台・尚綱女学校創設者）のバイブル・

同志社神学校中興の祖

日野は、ほぼ十年間、他校で働いた後、一九三〇年に同志社に復帰し、数々の功績を残した。神学部は彼の働きに報いるために肖像画を作成した。栄光館のデントン（M.F. Denton）の肖像画を描いた長尾己画伯の作品（一九四〇年）である。

さらに日野の死後（一九六一年）には、後輩にあたる大塚節治（神学部教授、のちに同志社総長）らの寄付金により、「日野講座」が神学部を設置され、講演会、しばしば持たれた。しかし、一九九六年一月の第十六回（講師は竹中正夫神学部教授）で中断されたままなのは寂しい。



日野真澄肖像画（長尾己作。神学部蔵）

クラスで求道した結果、同派の中島力三郎牧師から吉野作造や島地雷夢らと洗礼（浸礼）を受けた。

こうして、「ブゼル・バンド」とでも呼びたい一群の青年信徒（内ヶ崎、吉野、島地、小西重直、栗原基ら）が仙台から世に羽ばたくに至った。内ヶ崎の場合、その起点は東華学校入学である。

内ヶ崎と同志社との縁は、東大生時代に復活する。現在の弓町本郷教会で海老名弾正牧師（熊本バンドの一員で、後に同志社総長）に師事した。その関係で後年、海老名に宛てた書簡十五通を本学人文科学研究所は所蔵する。

ちなみに、同志社ゆかりの徳富蘇峰記念館（神奈川県）も、海老名の後輩、蘇峰に宛てた内ヶ崎書簡を八通、保管する。内ヶ崎は、後半生、早稲田大学教授、牧師（ユニテリアン教会、衆議院議員（副議長））として幅広く活躍する。

早稲田では、時の文学部科長が浮田和民教授（熊本バンドの一員で、同志社では海老名の同級生）であった。さらに内ヶ崎はユニテリアン運動の第一人者でもあるが、安部磯雄、岸本能武太、村井知

最近では、その竹中が『同志社山脈―一一人のプロファイル』（二〇〇三年）で「同志社神学校中興の祖」と題して日野の紹介をして、復権に努めた。

日野の場合、もしも仙台に同志社分校がなければ、同志社本校で修学、就業する可能性は、ほぼなかったであろう。それだけ、東華学校、とくにデフォレストの感化は大きい。日野が認めた「最も印象深かりし東華学校時代」と題した恩師デフォレストを追悼した一文からもそれがはっきりと読み取れる。

「予は故郷を出でてより、教育は仙台と京都とニューヨークで受けたが、最も深刻なる印象を残したのは、仙台東華学校に於ける教育である」（『新人』復刻版第一二巻第六号、一九一一年六月号、六〇頁、龍溪書舎、一九九二年）。

田中兎毛

最後は東華学校教員からひとり、田中兎毛である。岸和田の出身で、一八七八年に同志社に入学し、在学中にラーネット牧師（D. W. Learned）から洗礼を受け、京都第二公会（現同志社教会）の会員と

なった。が、入学八年後に卒業を待たずに、校長の新島の勧めで同志社を中退し、仙台に教員として赴任。

在職中、デフォレストらと教会設立に尽力し、仮牧師（初代牧師は三宅荒毅）に就任したデフォレストを助けて、教会役員（会計）として働いた。

学校閉鎖の後も、デフォレストらと教会を守り抜き、自ら二代目の牧師に就任した。その後、北海道の開拓伝道に転じ、いまの札幌北光教会や小樽公園通教会を立ち上げ、それぞれ初代牧師となる。北海道伝道をも夢見て、仙台に橋頭保を築いた新島の期待に十分応えた歩みであった。

その後は、関西に戻り、神戸女子神学校（後に聖和大学、現関西学院大学）の教頭、ついで兵庫教会牧師にも就任した。

田中忠雄

田中の札幌時代に誕生した男児が、クリスチャン画家となる田中忠雄（一九〇三〜一九九五）である。小学生の頃、父親の転勤に伴い神戸に転じ、やがて兵庫県立神戸第二中学校（現県立兵庫高校）

に進学した。

在学中に同志社系の兵庫教会で父親から洗礼を受けたこともあって、早くから同志社には親近感を持っていたが、美術を専攻したために京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）の図案科に進学した。奇しきことに、田中は同じくクリスチャン美術家として有名な小磯良平とは、小・中学校を通して同級であった。さらに、田中と小磯が神戸二中の五年生（十回生）の時に、東山新吉（後の魁夷）が十四回生として入学して来るのも、奇しき巡りあわせであった。東山もまた先輩の小磯の後を追うように東京美術学校（現東京芸大）へ進学する。

田中は同志社に進まなかったものの、係累に同志社関係者がいる。たとえば妻（志津）の父親、中村正路（一八七五〜一九四一）。新島も支援した熊本英学校で海老名弾正の指導を受けてから、東京で他教派（聖公会）の立教や東京三一神学校に学ぶ。しかし、卒業後は同志社系教派に復帰して、大阪、鳥取、福岡などで牧師として伝道に従事した。

一方、田中忠雄は後半生、武蔵野美術

大学教授の時（一九六三年）に神学館を新設した同志社大学からチャペルの装飾を依頼された。クリスト教美術の権威であっただけでなく、実父が卒業生のうえ、岳父と同様に同志社系の牧師であったことが、決め手となった。

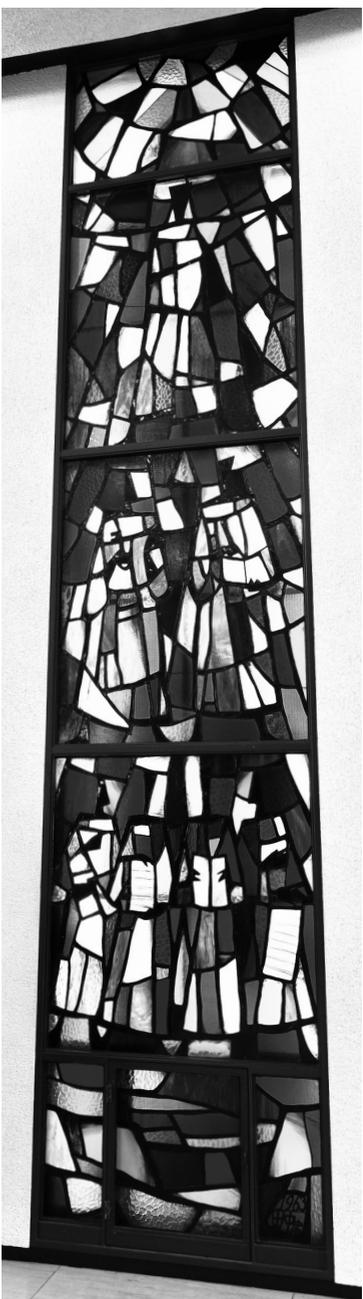
直接の要請は、神学部の中中からであろう。彼は、アジアクリスト教美術協会を結成して初代会長を務めたほど、美術に明るい美術愛好家でもあった。

神学館チャペルを飾る 三つの作品

神学部から依頼を受けた田中画伯は、新築チャペルを三つの作品で飾ることに精魂を傾けた。

ひとつは、入口の壁を飾るレリーフ。旧約聖書の冒頭部分（天地創造物語）をヘブル語で彫った。

二つ目は、正面中央のステンドグラスである。「高さ六米、幅一米二十五、この窓を考えるように同志社神学部からのお手紙を頂いた時のわたくしの感動は、どう表現してよいか分かりません」と田中は告白する（「神学館礼拝堂」同志社



神学館チャペル正面のステンドグラス
(田中忠雄作)

大学神学部HP)。

縦長の窓は、五つの枠に仕切られた。最上部が大空（栄光の神）、最下部が大空（人間社会）で、その間を三分割する下から福音書記者（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）、中段にはペテロとパウロ、そして最後に再臨のキリストが両手を広げている姿が描かれている。

三つ目は、正面右手の油彩画で、「聖霊降臨」（ペンテコステ）と名づけられている。

神学館チャペル以外にも田中の作品は、学内に存在する。同志社チャペルに掛けられた十枚の肖像画のうち、小崎弘道（同

志社第二代総長）と第八代総長の海老名弾正（田中忠雄の岳父が、熊本時代に指導を受けた牧師）のものが、そうである。

分校の残照・光芒

同志社仙台分校は、短命だった。さながら大空のかなたに消え去った流れ星である。

だが、今もその残照や光芒の痕跡は、目を凝らせば同志社本校でも見出せる。その好例が田中兎毛の系譜である。彼の孫の配偶者が、遠藤彰（一九二〇〜二〇〇九）である。遠藤は堺市の出身で、同志社大学文学部神学科に入学。在

学中は同志社グリークラブに所属して、指揮者も務めた。卒業後は、ユニオン神学校、ならびにチューリッヒ大学への留学を経て、神学部に奉職する。

教授、神学部長を歴任する傍ら、市内の錦林教会牧師をも務めた。同志社退職後も広島女学院の院長・学長・理事長としてキリスト教教育に挺身した。

彼の子息は、いま本学神学研究科に在籍中で、博士論文を準備中である。かくして、田中家は四代にわたって同志社に関り続ける。仙台（分校）と京都（本校）が今もなお、見えない糸で結ばれている証でもある。